

The World Loves European Cinema

好きです、ヨーロッパ映画

2月のベルリン、5月のカンヌ、9月のヴェネチアといえば、最も歴史の長い世界の三大映画祭の開催地だ。欧州は伝統的に映画の新潮流を生み出す土壌を備えているが、こと観客動員数に関しては、世界を席捲する米国ハリウッド流映画にかなわない。しかし今、欧州の映画は製作国の観客や国外の少数の愛好家だけが鑑賞するものではなくなっている。最近の欧州出身監督の活躍は世界の注目を集め、第三国との共同製作も活発だ。グローバルに広がった映画市場で、欧州の映画は大いに健闘しつつある。

多様性が欧州映画の特徴

欧州は映画発祥の地であり、高名な監督ばかりでなく、イタリア・ネオリアリズムやフランスやチェコのヌーベルバーグといった近代映画に大きな影響を与えたトレンドを生み出してきた。米国の映画産業の特徴が巨額予算、効率性、スター制度だとすれば、今日の欧州映画を特徴づけるのはその多様性である。そもそも「欧州映画」というものはない。芸術性や費用の面で共有する部分もあるが、多くの作品が各国の現実に根ざすものだ。『善き人のためのソナタ』(2006年、ドイツ)や『ゴモラ』(2008年、イタリア)の成功は、むしろひとつの文化に根ざした映画ほど、世界での反響は大きいということを示したといえよう。



Albatros Film

さらに、米国映画に比べて、欧州映画は監督が誰であるかや、製作者の視点に重きが置かれている。ラース・フォン・トリアー(デンマーク)、ケン・ローチ(英国)、フランソワ・オゾン(フランス)、ファティ・アキン(ドイツ)といった監督の作品がよい例だ。また、欧州映画界は外国映画界とのコラボレーションも多く、レバノン映画『キャラメル』はおおむねフランス製作といえるし、イスラエル映画『バシールとワルツを』の成功は複数の欧州の製作者の関わりが大きく貢献した。



Cetera International

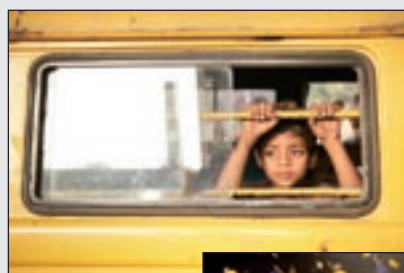
MEDIAインターナショナルの成功

欧州連合(EU)の「MEDIAインターナショナル」(まもなくMEDIAムンドゥスに移行)は、米国製でも自国製でもない異文化映画をあえて上映しようとする映画関係者を支援

MEDIA支援の英国映画、8部門でアカデミー賞受賞

英国ダニー・ボイル監督の作品『スラムドッグ\$ミリオネア』は、米国の第81回アカデミー賞で最優秀作品賞、最優秀監督賞、最優秀主題歌賞、最優秀作曲賞、最優秀編集賞、最優秀録音賞、最優秀撮影賞、最優秀脚色賞の8冠に輝いた。推定総予算1,100万ユーロのうち、配給向けにMEDIAインターナショナルから83万ユーロの支援を受けた作品だ。

このほか、アカデミー賞候補作品のうち6作品がMEDIA支援を受けた欧州映画だった。



Ishika Mohan/Pathé



するプログラムである。欧州映画の海外での上映を支援するネットワーク組織「ヨーロッパ・シネマ」は過去6年にわたりMEDIAインターナショナルの支援を受け、アジアや



中南米の映画館や配給会社などに助成を行ってきた。ヨーロッパ・シネマによると、海外でも一般の人々の欧州映画への関心が高まりつつあると

いう。中でもインドや中国の映画市場は巨大で、かつ外国映画に開放的であり、欧州の映画製作者にとって商業的に逃したくない大事な市場である。また、アルゼンチンでは映画市場における欧州映画の割合が9%と高い。

もともとMEDIAインターナショナルは、世界で相互主義が求められていることを受けて始まった。このプログラムは欧州映画の普及を目的として、アジア、中南米、南地中地域の映画関係者を支援している。さらに、これらの地域で製作された映画の欧州での上映を支援している。EUは、これまでなかったこうした資金援助プログラムを通して、欧米以外で製作されたさまざまな作品の上映を促進する。より多彩な映画が見られることは、映画館のイメージ向上ばかりでなく、映画館の経済基盤を強化することにもなる。

東欧の新鋭監督たちの活躍

映画製作の歴史が長いイタリアやフランス、独自の映画製作を発展させるドイツや北欧と並び、EUの新規加盟国である中・東欧からも才能ある若手映画監督がさまざまなジャンルで活躍している。例えば、ルーマニアのクリスティ

アン・ムンジウ監督の『4ヶ月、3週と2日』は2007年カンヌ映画祭のパルムドール（最高賞）を受賞した。受賞作品は最低限の予算と限られた時間の中で製作されたが、卓越した技術と脚本によってルーマニアの史実に光を当て、世界中で高く評価された。この成功に刺激を受けたルーマニアの優れた若手監督たちの登場が注目されている。

こうした新鋭監督たちの将来が期待されるのは、彼らが主題の力強さ、作風、そして独自の表現方法を持っているためだ。

ハンガリーからは、ジョルジュ・パールフィ、コーネル・ムンドルツォ、ベネデク・フリーガウフの3人の監督がオリジナリティーで高く評価されている。古典的形式や優れたコメディで知られるチェコ映画は米国でもヒットしている。ボフダン・スラーマ、ペトル・ゼレンカ、ヤン・フジェベイク、イジー・メンツェルといった監督の活躍のおかげだ。アンジェイ・ヤキモフスキ監督の『トリック』



Comstock



上 『トリック』のポーランド・オリジナル版ポスター
Kino Swiat
右 同イスラエル版
Shapira Films



EU支援で日本も映画製作に参加——企画マーケット「パリス・プロジェクト」

MEDIAインターナショナルは育成、製作と配給、映画館ネットワーク構築の3つのカテゴリーでの助成プログラムで、日本を含む約50カ国がこれに参加している。例えば製作・配給分野では、毎年7月のパリ映画祭中に開催される企画マーケット「パリス・プロジェクト（PP）」がMEDIAインターナショナルの支援を受けているが、これは、欧州とアジアやほかの地域との共同製作を、プロデューサー同士を引き合わせることによって推進するものだ。日本からPPへは、国際共同製作支援プロジェクトJ-Pitch＝主催：経済産業省・（財）日本映像国際振興協会（ユニジャパン）＝を通してプロデューサーが派遣されている。

2007年には、日本人プロデューサーの小野光輔氏がマレーシアのニューウェーブの旗手として知られるヤスミン・アハマド監督に出会い、共同製作の企画が立ち上がった。『ワスレナグサ』と題するこの映画は、マレーシアの

少女が自分のルーツを求めて日本へ旅する物語。2008年の釜山国際映画祭の企画マーケット「プサン・プロモーション・プラン」で最優秀企画賞を受賞した。

また、2008年に日本から公式選出された企画『FOUJITA』は、PPでフランスの共同プロデューサーを見出した。エコール・ド・パリの画家として知られる藤田嗣治の物語を日仏合作で製作することになる。J-PitchからPPへの2009年度派遣募集の詳細は、4月以降に発表される。



2007年PPのミーティング会場。右端が小野プロデューサー

J-Pitch <http://j-pitch.jp/>

が好例だが、ポーランドでも毎年国際映画祭を巡回して上映されるような作品が複数製作されている。

ヨーロッパ・シネマによれば、若手監督が直面する課題は、いかに国際市場に映画を売り出すか、である。有名外国企業の支援があれば公開は容易になるが、ヨーロッパ・シネマやヨーロッパ・フィルム・プロモーションといった機関を通じたEUの支援もまた、彼らにとっては大きな助けとなっている。

デジタル化を推進

特に映画館にとって、映画のデジタル化は重要かつ不可避な進展であり、EUはこれを積極的に進めている。ヨーロッパ・シネマはデジタル化が映画配給に柔軟性をもたらす点に着眼し、映画館への最新情報の伝達、配給会社や映画上映設備の企業との連携などで、この問題に早くから取り組んでいる。デジタル化には大きな投資が伴うが、実現

すれば配給会社にとっては複製費や輸送費を節約することができる。欧州映画の配給は、欧州も含む世界各地において、ほとんどが小規模配給会社か映画館を通じた配給ではない。現在の制度では、米国配給会社との合意のある大規模な映画配給グループはデジタル化を進めやすいが、小さなグループや独立企業にはこうした仕組みがないため、デジタル化は容易ではない。欧州委員会は、ヨーロッパ・シネマや専門家グループとともに、この分野について検討を続けている。長期的に見て、世界で欧州映画を普及させるため、また欧州で域外の映画を上映するために、デジタル化は絶対的に重要になっている。EU

取材協力：ヨーロッパ・シネマ(クロード＝エリック・ボワルー事務局長、ファティマ・ジュメ国際部長)

ヨーロッパ・シネマの詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://europa-cinemas.org>

ヨーロッパ映画を観に出かけよう

EUフィルムデーズ

東京国立近代美術館フィルムセンター、在日EU加盟国大使館および文化機関、駐日欧州委員会代表部の共催で開催されるEUフィルムデーズは、7回目の今年、7本の日本劇場初公開作品を含め21本のEU加盟国の映画を上映する。監督などのゲストも例年になく多く来日する予定。

期間：2009年5月29日(金)～6月20日(土)

会場：東京国立近代美術館フィルムセンター
(中央区京橋)

<http://eufilmdays.jp>

※6月下旬に京都に巡回予定



EUフィルムデーズで日本劇場初公開となる7本。①『カラマーゾフの兄弟』(チェコ) ②『はじめてに目ありき』(オーストリア) ③『バトル・オブ・リガ』(ラトビア) ④『私は死んでいない』(フランス) ⑤『永久機関』(リトアニア) ⑥『コウノトリの帰還』(スロヴァキア) ⑦『神様の小さなお庭で』(ポーランド)

大阪ヨーロッパ映画祭

OSAKA
EUROPEAN
FILM
FESTIVAL

駐日欧州委員会代表部ほかの助成を受け、大阪ヨーロッパ映画祭実行委員会が主催する本映画祭は今年で16回目。欧州の優れた映画鑑賞の機会を継続して提供しており、映画ファンが全国から集まる関西の文化イベントとして定着している。

期間：2009年11月

会場：大阪市内

<http://oeff.jp/>